

自分の気持ちを解放して見える 一瞬の“日常”を切り撮って。

湖 INTERVIEW

写真家

川内倫子さん

柔らかい光と色と透明感のある写真——
“日常”に目を向け、その本質を切り撮る
スタイルで若い世代の支持を得ている
滋賀県出身の写真家・川内倫子さん。
写真集の出版、国内外での展覧会を重ね、
さらなる進化を遂げようとしています。



川内さんの愛機「ローライフレックス」を手に。





写真集「Cui Cui」より Untitled, from the series of "Cui Cui", 2005



Courtesy of the artist and FOIL GALLERY, Tokyo

吉田 ●川内さんの写真集を見ていると、何気ない日常でありながら、ちょっととしたひとコマが際立って見えるから不思議です。特に写真集「Cui Cui (キユイキユイ)」が印象的で、川内さんが4歳まで過ごされた五個荘の風景と、ご自身のおじいさん、おばあさんをはじめ、ご家族の素朴な姿が写っていますね。

川内 ●この写真集の作品は、ほとんど滋賀で撮りました。私はおじいちゃん子で、おじいちゃんが作ったイチゴミルクも写っています。4歳くらいの時に母の留守中におじいちゃんが作ってくれました。20歳になつて遊びに行つた時も昔と同じように作ってくれました。「懐かしいなあ」と思つて撮りました。

吉田 ●ご家族を写真集で公開するのは勇気がいるのではないですか。

川内 ●私がメインに見せたいのはプライベート写真ではないんです。自分の家族を通して、人間が持っている普遍

的な共通意識みたいなものを見せたい。写真を見て「懐かしい」とおっしゃる方がすごく多いんですけど、それは見る人の潜在意識の中に持っている思い出が呼び覚まされるからだと思います。写真を見た人が何かを思い出したり、感じる写真でないと、自分が公おおやに発表する意味はないと思っています。

吉田 ●だからこそ、見ている人が「すーつ」と入つていける世界なんですね。この写真集の作品はプロになつてから撮られたのですか。

川内 ●13年間撮りためたもので、学生時代の写真もあります。

吉田 ●写真集の作品の構成は、すべて川内さんご自身でされているとお聞きしましたが。

川内 ●撮りためた写真の中から、自分が本当に見たいと思うものだけを選んで一冊に編集しています。一緒に作業する編集者やデザイナーの意見は受け入れませんが、最終判断は私の意志を通してくれるんです。

吉田 ●真剣に議論して作品を作るのは気持ちがいいでしょうね。ところで川内さんには若いファンが圧倒的に多いでしょう。私たちの世代は経済が右肩上がりの時代もありましたが、今の若い人はバブル崩壊後のデフレ経済の中で毎日を追われている。頑張っているのに達成感が少ない。そうした時代には合っています。

吉田 ●川内さんの場合、最初からこのテーマでいこうと、決めて撮っておられるわけではないんですか。

川内 ●最初にテーマありきでもないのですが、それに縛られるとすごく小さな世界観になつてしまふ。自分の気持ちを解放し、そこで見えるものを捉え、後から熟成させるような考え方が私には合っています。

吉田 ●一瞬を捉えた写真が不思議なほど際立つのはどうしてですか。

川内 ●いろいろな要素があると思います。一般的にはブレていない、クリアに写った写真が良いといわれますが、それでは自分の気持ちが伝わらない。例えば、写真集「花火」を出した時はきれいに写り過ぎていた写真を外しました。私が見たいのは花火の周辺に漂う空気や気配です。花火には日本人独特のわびさびの感性や、一瞬で消えてしまふ儂はかなさと美しさがあり、人の人生を象徴するものでもありますから。

吉田 ●そうした写真は「ローライフレックス」という二眼レフカメラで撮られていますね。

川内 ●そうです。手の平に入るくらいの大きさで、普通の一眼レフとほぼ同じ重さ。左右が逆に写り、下を向いてファインダーを覗くので威

川内さんの写真は日常のひとコマが際立ち、心を和ませ、落ち着きを与えてくれます。

滋賀銀行常務取締役 吉田郁雄

人間が持っている普遍的な共通意識に届き、何かを感じさせる写真でないと意味がない。

写真家 川内倫子さん(かわうち・りんこ)



川内倫子講演会「AILA—川内倫子のまなざし」より
(6月20日成安造形大学にて撮影/福尾行洋)。

圧感がなく、被写体の人が緊張しない自然な表情が撮れます。シャッター音が小さいので、撮ってはいけないところでもばれません(笑)。見た目もかわいいで、ファッションで持ち歩いているように見えますしね。

吉田 ●6×6の正方形の撮影サイズが特徴そうですね。

川内 ●このサイズの方が1つの被写体に集中しやすいのです。これまで6×6にこだわって写真集を出してきたのでそのイメージが定着していますが、最近は一画レフのデジタルカメラも使います。ローライフレックスで撮るとシャッターを切るまでにワンクッションあり、その時の空間も写るように思えるんですが、一眼レフは息つく暇もなくシャッターを切れるから、カメラを向けるとハンターになったようで、アグレッシブになりますね。

吉田 ●大学ではグラフィックデザインを学ばれていたそうですが、写真家を志したきっかけをお話いただけますか。
川内 ●学生の頃は写真の世界に進もうとは考えていませんでしたが、週に一回写真の授業があり、暗室でプリントする作業が好きだったんです。自分

自分のイメージに近づける プリント作業が好きで 気がつけば写真がライフワークに。

でプリントすると、モノクロだけだと自分のイメージに近づける。もともと手作業で何かを作るのが好きで、繰り返しのが楽しくなってきたので、気がつけば写真が自分のライフワークになっていました。

吉田 ●どなたか師事された写真家はいらっしゃるのですか。

川内 ●誰かに教えてもらおうと、その人のカラーが染みついてしまつて、そのあと自分のオリジナリティーを探すのが大変なので、誰にも師事していませんでした。私がカメラを始めた時はまだ徒弟制度が残っていました。その時代はデジカメもなかったし、ライティングのノウハウも教えてもらわなければなりません。女性のカメラマンがブームになってきたのは、コンパクトカメラで誰でも撮れるようになってきたから。感性だけでやっていけるようになったからですね。私はギリギリ昔の時代を知っている世代なんです。

吉田 ●昨年は「滋賀県文化奨励賞」

を受賞され、今年6月には母校である大津市の成安造形大学で個展を開催され、講演もされました。年2回は五個荘に帰られるそうですが、ふるさと滋賀を外から見たいかですか。私も長年住んでいます。滋賀は本当にいいところですよ。

川内 ●私もそう思います。琵琶湖をはじめ滋賀にしかない自然や文化があります。ただ関西には神戸、大阪、京都、奈良と有名な観光地がひしめき、滋賀の影がちよっと薄くなつてしまふのが残念です。

吉田 ●川内さんは活動の拠点を東京においておられますが、海外での評価も高く、世界各地で展覧会を開いておられますね。

川内 ●いろいろな国で写真集のスライドショーをしたら「自分の家族を思い出した」と、涙を流されます。海外で受け入れられると思っていなかったんですが、見た人が何かを思い出すきっかけになれたのはうれしいですね。海外ではよくワークショップをするのですが、最近、教える立場に喜びを感じています。自分が教えるというよりも一緒にやるといふ感じですね。その中にもひとつの循環というものがあつて、私が持っているものを相手に渡すと、向こうが返してくれる。今まで自分がやってきた仕事の幅も広がり、写真を通してこういう仕事もあったんだと思えました。ますます人生が豊かになる気がしますし、すばらしい仕事に

就けてよかったとしみじみ思っています。

吉田 ●川内さんと仕事の世界は違いますが、私も銀行員としてお客さまと一緒に将来のビジョンを話し合っています。ご融資させていただくお客さまと我々の思いが同じベクトルに進むと、そのお客さまの夢が実現し、目に見える形にできあがることは結構あります。

川内 ●それもクリエイティブですね。何かを作るだけでなく、人と人の間にエネルギーを循環させていくことはすごくクリエイティブだと思う。人と人をつなぎ、お金を循環させることが銀行のあり方ですからね。

吉田 ●ところで、次に写真集を出版されるのはいつ頃の予定ですか。

川内 ●来年3月にニューヨークの出版社から写真集を何か国語かで出版します。これは最初に出した写真集で代表作でもある『うたたね』の新しいバージョン。日常のスナップを集積するのが自分の原点ですが、10年ぶりに同じスタイルで出すので成長した姿を見せられるといいですね。

吉田 ●川内さんの目線やカメラワークはいつも同じではなく、年月が経つことに進化していくと思います。その世界観や思想は写真集に表れるでしょうし、どのように変化されるのか今後、ますます楽しみです。本日はありがとうございました。



Profile ●川内倫子

1972年滋賀県生まれ。93年成安女子短期大学造形芸術科卒業。97年第9回写真3.3m²(ひとつぼ)展グランプリ受賞。2002年に写真集「うたたね」[花火]で第27回木村伊兵衛写真賞受賞。09年には優れた業績とその将来を期待され、滋賀県文化奨励賞を受賞。主な著作に「花子」「AILA」「Cui Cui」「種を蒔くSemear」などがあり、国内外で展覧会を開催。

今年6/20~7/10、成安造形大学で催された川内倫子展「AILA」より(撮影/高橋耕平)。